「イエスにある死んでも生きるいのち」

ヨハネの福音書１１：１－４５

November.1.2026

ヨハネの福音書１１：１－４５（パワポ）

Preface

私たちは今、召天者記念礼拝を献げておりますが、召天者記念礼拝とは、天に召された私たちの教会の先達の方々、家族や友人などの、私たちそれぞれにとって大切な方を思い起こしながら唯一まことの神を礼拝するひと時です。

ここに集う私たちの多くは、これまで、身内の死や、親しい方の死に対面して来たことと思います。

召された方の召されるまでのその過程において、また召された時のご様子や様々な苦しみや悲しみを私たちは抱いていることと思います。

特に、親しい間柄に合った仲間や、肉親の死というのは、時が経っても、その傷や辛く悲しい思いは、そう簡単に癒えるものではないように思います。

そして、その死の理由が何にせよ、「神はなぜ、その人を助けてくれなかったのか」、「神はなぜ、私たちの祈りを聞いて下さらなかったのか」という思いとともに、「神に見捨てられたのではないか」と思ってしまうことさえある程に、死という圧倒的な絶望の出来事の前に、私たちは無力であります。

でも、私たちが毎年、このようにして召天者を覚える礼拝を献げる理由は、死が全ての終わりではない、死んだらお終いではないからなんだと思います。

召天とは、いのちの創造者である父なる神、救い主イエス、聖霊なる神様の三位一体の神様が、お一人お一人をその時々に適って神の御許へと召して行かれたということです。

つまり、続きがあるということです。

キリスト教は、復活の宗教と言われますが、２０００年前の日曜日の朝に、死より復活された主イエス様を覚え記念する礼拝を、毎週日曜日に２０００年間献げ続けて来ました。

週の初めの日である日曜日に、復活を記念することから、私たちのその週の歩みを始めるのです。

私たちの人生は死をもって終わる人生ではなく、死は復活に飲み込まれた、死はむしろ、神の国における新しいいのちの始まりの出来事であるということを覚えるために、毎週日曜日に礼拝を献げ続けてきました。

来たるべき時に、神の国において再会できる希望が、主イエス・キリストにいて与えられていることを覚えるのです。

今朝、この召天者記念礼拝が、今一度、私たちの心とたましいに、死ではなく、天の御国における再会の希望があることを刻むひと時であれればと願って

おります。

Part One

先程読みました聖書箇所は、イエス・キリストが、友人ラザロの死の出来事に触れた時の記事ですが、２５・２６節を見ますと、イエス様はこんな言葉をもって、今まさに愛する家族の死に直面しているマルタに語りかけました。

ヨハネの福音書１１：２５，２６（パワポ）
わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことがありません。あなたは、このことを信じますか。

もし、皆さんの大切な仲間や愛する家族の死と対面している時に、イエス様がそばに来てこのように仰ったら、この言葉をどう受け止めるでしょうか？

中々に受け入れることが難しい言葉だと思います。
「『わたしを信じる者は生きる』と言われても、今実際に亡くなってしまったのに、死んでも生きるってどういうことですか？　私の大切な家族は、イエス様のことを信じていなかったから死んだのですか？　決して死ぬことはないなんてことがあるんですか？」という疑問と言いましょうか、あきれや怒りの感情が伴うような思いが沸き上がってくるかもしれません。
「今のこの状況の中でかける言葉として適切なのだろうか」という思いまで、沸きあがってくるかもしれません。

ですが、それ以上に私たちが心に留めたいのは、この言葉が、愛する家族を失ったばかりの人にイエス様が実際にお告げになった言葉であり、しかも、ラザロの復活という出来事にまで達しているという事実です。

Part Two

ラザロがなぜ死んだのかという理由については、病気であったと記されています。
マルタとマリアは、イエス様のところに使いを送って、兄弟ラザロが病気にかかっていることを伝えました。
恐らく、イエス様に見舞いに来て頂き、助けてほしかったんだと思います。
ところが、その思いを伝え聞いた後、イエス様は二日間さらにその場に滞在されてから、ベタニアというラザロの住む町に出かけました。
結果として、イエス様がラザロのところに着いた時には、ラザロが亡くなってから４日ほど経っていました。

ラザロの死に直面した姉のマルタと妹のマリアの反応は対照的です。
マリアは家の中に閉じこもって呆然としている様子ですが、マルタは悲しみ

つつも気丈に振る舞いながら、弔問客の相手をしていました。

親しい家族の死は、その家族にとってとても苦しく悲しいことだと思いますが、それ以前に、まだまだ死の現実を受け止めきれないショックの方が大きいかと思います。
葬儀をしても現実感がない。
夢であって欲しいと思うようなこともあるほどに、受け止めたくない事実。
でも、少しずつ周りの人に声をかけられ現実を受け止めるようになる。
そんな時、イエス様がやって来ました。
そして、マルタは、抑えきれない気持ちをぶつけます。

ヨハネの福音書１１：２１（パワポ）
主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかったでしょうに。

私たちも、マルタと同じように思うのではないかと思います。
「神を信じているのに、なぜこのような不幸が起きるのか。神様は、私の祈りを聞いてくれなかった。」
マルタの心の葛藤は、想像するに難くありません。
「なぜイエス様は来てくれなかったのか。もし来てくれたら助かったのに…」
たらればという言葉、言っても仕方のないことだと分かってはいるけれども、口にせずにはいられない思い。
言わなければ収まらない気持ち。
この気持ちを、マルタはイエス様にぶつけるのです。
ぶつけていいのです。
マルタのそんな思いを受け止めるために、イエス様はマルタの元に、マリアの元に来て下さったのです。

人は、心にあることを言語化して吐き出すことによって心を軽くすることが出来ると思いますが、マルタは、その心をイエス様に伝えました。
そうして、マルタは、死して終わりではないという希望、人は死をもって終わるのではないという希望、神がそれでもなお、彼女たちと、私たちとともにいて下さるという希望を改めて持つことが出来ました。

ともすると、私たちは、「嘆いてはいけない」とか、「しっかりしないと人を困らせてしまう」とか、色々な思いで自分の感情を押し殺してしまうことがあるように思いますが、まずは、しっかりと受け止めきれない心を出すことが大切なんだと思います。
人に伝えることも大切だと思いますが、人に伝えて見返りを期待することには限界があります。
人に伝えること以上に、神に、イエス様に、祈りという形で心を出すのです。
すると、その心を静かに受け止めて下さるお方が、静かな希望を与えて下さ

います。
マルタとマリアの心を静かに受け止めて下さったイエス様が言います。
「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことがありません。あなたは、このことを信じますか。」

ところが、「わたしを信じる者は死んでも生きる。生きていて信じる者は誰も死なない」なんてことは、神を信じたら死なないなんてことは、物理的にあり得ません。
私たち人間が生まれた時から、誰しも決まっている唯一のことは、私たちはいつか必ず死ぬ時が来るということです。
どんな人もそれを避けることは出来ません。

では、なぜイエス様はこのように言われたのでしょうか。
それは恐らく、私たち生きている者たちへの慰めであり、人は死して終わる存在ではないということを伝えたかったのだと思います。
そして事実、イエス・キリストを神と信じ、イエス・キリストの言葉、その生き方を信じた時に、正に私たちの身に起こってくる事柄であるということです。

Part Three

実際に、この記事の最後は、ラザロがよみがえるという結末をもって幕を閉じます。
イエス様がラザロの墓に赴き、「ラザロよ、出て来なさい」と言いました。
するとラザロが、体を布でくるまれたまま出てきて、文字通り「復活する」という結末を迎えるのです。
私たちが作ったこの社会で培われて来た所謂常識という見地からしますと、死者のよみがえりなんていうことは、考えにくいことかもしれません。

では、この聖書箇所が、意味していることは何でしょうか？
そのものずばり、死者のいのちは、神のことばによって墓から呼び出され、死から解放され、死の束縛から自由にされる道があるということなんだと思います。
墓の前で悲しむ時は終わりを迎え、ラザロの死を悲しみ続ける必要はない。
ラザロが、イエス様の言葉によってよみがえり、新たないのちの時を歩み始めたように、天の御国にて、神の国にて、永遠のいのちを生きる希望が人にはあるんだということを、私たちの肉眼で分かるように、イエス様示して下さったんだと思います。
「わたしを信じる者は決して死ぬことはない」という言葉の意味は、この地上での生は終わるけれども、永遠の神の御国にて、永遠のいのちを生きる道が、希望があることを教えて下さっているのです。

だから、この事件を目撃した人たちの多くが、今、目の当たりにしているその出来事を事実として受け止め、４５節。

ヨハネの福音書１１：４５（パワポ）

のです。

イエス様は、家族の死という最も辛い別離の悲しみにあるマルタとマリア姉妹のところに来て、人は死んでも生きるという神の恵みにある最大の良き知らせを伝え、目に見える形で示して下さいました。
それは、私たちにもです。

私たち人間すべては、死という事実を前にして苦しみ悲しみます。
生まれながら罪人として生まれてきたすべての人間が通らなければならない、ある意味宿命のようなものであるかと思いますが、人は死をもって終わるのでないということを告げ知らせて下さったのです。

ラザロが墓から自由になって行ったことを見せて下さることをもって、墓の前で悲しむ時は終わりを迎えた。
ラザロの死を悲しみ続ける必要はない。
なぜならば、彼は今、神の御許でよみがえり、新たないのちを歩んでいるからだと、告げ知らせて下さったのです。
つまり、「わたしを信じる者は決して死ぬことはない」という言葉の意味は、地上での生は終わるけれども、神の国にて永遠のいのちを生きる希望を与えられているということではないかと思います。

そして何よりも、この言葉が、マルタとマリアに語られたということが大切なのだと思います。
つまり、生きている者こそ、その別れに悲しむからですね。
先程も言いましたように、しばらくの間悲しむことは必然・必要だと思いますが、その後、私たちは心の中にある思いを神の御手にお委ねした時、私たちは悲しみから引き出されるということ。
正にラザロが墓から自由にされたように、私たちも死からよみがえる道が備わっているということです。

Conclusion

もう大分前になりますが、「千の風になって」という歌が有名になりました。
その歌の歌詞に、「私の墓の前で泣かないで下さい。そこに私はいません。眠ってなんかいません」という歌詞がありますが、この歌の歌詞は、元々アメリカで作られたものなんだそうです。
そして、この歌詞が、教会墓地の墓石に刻まれているのを写真で見たことが

あります。
そこから想像を広げてみたのですが、「風」という言葉は、聖書では「霊」とか、「息（呼吸）」とか、または、聖霊なる神様を表現する言葉として用いられています。
なので、もしかすると、この詩の書き手は、「私は死後、神の息に生かされる存在になるのだ」という思いを詩にしたのではないだろうかと想像しました。

確かに、聖書の創世記には、「人は大地のちりで形造られ、鼻に神のいのちの息を吹き込まれて、人は生きるものとなった」と書かれていますが、「その通りに、今一度、天の御国で神の息を、神の風を、神の霊を吹き込まれて、神とともに神の国で生きているから、私の墓の前で泣くことはしないで、安心して過ごして下さい」という信仰告白を歌詞にしたのかもしれないと想像しました。

すみません。
私の想像が事実かどうかは分かりませんが、今日の聖書箇所で、イエス様が私たちに伝えたい一つの事実は、「人は死んでも、イエスにあって生きるいのちが確かにある」ということです。
だから、私たち人間には、死が終わりではなく、復活という道が、唯一まことの神にあって備えられているということを改めて覚えたいと思うのです。

いのちの創造者である父なる神は、私たちに一人一人に出会いを与えて下さいました。
その出会いは、死をもって一度別れを経験しますが、神の国における再会の希望が与えられています。
故に、召された方々との再会の希望をもって、この礼拝堂を出て行ければと願います。
イエス様は言われました。
「わたしを信じる者は死んでも生きるのです。」
私たちの思いを主にお委ねして、天の御国の平安と希望と慰めを頂いて参りましょう。
お祈りいたします。

祝祷：ヨハネの福音書１１：２５